



馬渡島では漁業が主要産業です。生うにやイカからアワビ、ふぐまで捕れ、魚介類の鮮度はどこにも引けをとらないでしょう。その上、多数の釣り場を抱え、釣り人に人気の島でもあります。季節を問わず釣り人が訪れ、地元テレビ局には新鮮な海鮮と釣りのあるロマンの島として紹介されています。

生活の環境は過酷

しかし、島の人々の生活はそれほど安穩としたものではありません。最近では若い働き手は減り、肝心の漁獲高も減少の一途。生活資金は先細り状況で、学校教育や老人介護などの問題も島の将来に重くのしかかる深刻な問題となっています。海を

島の人々に育てられる

隔てている分、離島ではこうした問題がより深刻で生活の環境は過酷ですが、それでも人々はいきいきと、力強く生きています。

馬渡島に赴任してから、二年

もり どの
森園

ごう き
剛樹

26期生、2003年卒



島の小中学校での防煙教育

唐津市馬渡島診療所

【私の勤務地】馬渡島は、唐津市呼子町から船で45分の沖に位置する離島。医療機関は当診療所のみで、医師は1人。0歳から100歳までおり、人口は約600人。カトリック教徒の移住の歴史があり、彼らの住む新村と仏教徒が住む本村からなる。

気持ちの支えに

私の場合、そんな気持ちと折り合いを付けるきっかけとなり、さらには今の気持ちの支えともなっているものに、島の人々の人間臭さ、たくましさがあるように思います。力強い生き

目が過ぎようとしています。他の離島同様、人々の大多数は高齢者です。島外の高次医療機関を容易に受診出来ない患者さんも少なからずおり、私が患者さんのその後を左右するような決定を迫られることも珍しいことはありません。

赴任当初は、そのため、各科の診療・方針決定を一人で行う重責や、最良の医療を提供できているかという自問に深く悩んだものです。設備が限定されていることによる悩みですから、これらはへき地で診療する医師の共通の頭痛の種なのかもしれません。

様の前では、悩むよりもまず精いっぱい、力いっぱいやるしかない、という気持ちにさせられるのです。

「患者さんに教えられる」とはよく言ったもので、じつくり向き合い、時にはひざをつき合わせて話し、彼らの生活を見ると、患者さんの喜びや悲しみ、不安といった直の感情に触れるだけではなく、そこには人生や人情の機微すら垣間見えてきます。まさしく、育てられている。そう思い、考えさせられるのです。

医師となつて四年目。医師としての普遍的なあるべき姿をいまだ模索している最中ですが、こういった関係の中に実は大きなヒントが隠れているように感じます。

この先、赴任がいつまでかはわかりませんが、島の人々を通して学ぶことはまだまだあるでしょう。学んだ経験を生かして、医師としても人間としても一層成長しつつ、今後も診療を通して島の人々に還元していきたいと思っています。

（次回予定は三重県）